

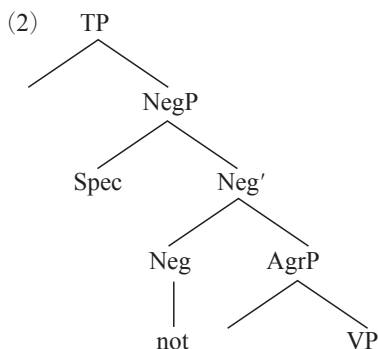
61 否定句NegP

英語の否定辞notは他の否定副詞とは分布が異なり、とりわけ文否定の場合、本動詞を否定するには助動詞doによる支えが必要である（*t*は屈折語尾の痕跡）。

- (1) a. Charles does not know. b. *Charles *t* not knows.

c. Charles *t* never/hardly knows.

Chomsky (1986) の障壁理論において、(1b) はnotが*t*位置からの**接辞繰り下げ (Affix lowering)** を妨げる障壁になっているから (1a) のようにdo挿入が不可欠であり、notが障壁ならば**否定句NegP (negative phrase)** を最大投射として形成していると最初に論じたのはPollock (1989) である。



NegPは現代の理論言語学においても標準的な分析であり、主要部notは何らかの機能範疇（通常vP）と併合してNegPを成すと見なされている。

語彙動詞ではないbe動詞と助動詞haveは、問題なくnotを飛び越えて**動詞上昇 (verb raising)** し、定形動詞として出現する。

- (3) a. You are not *t* lenient. b. I have never *t* been abroad.

Rizzi (1990) が唱えた**相対的最小性 (relativized minimality)** では、X ... Y ... Zの配列において、X, Y, Zが同一の範疇ならばYを飛び越えてXとZを関連付けてはならず、これを守って(3)を生成させるため、notを主要部とはせず、何らかの機能範疇（通常NegP）の指定部に位置させる分析も相次いだ (Ernst 1992, 2002; 野村 2003 等)。しかし結局のところLasnik (1999: 108) による「NegとVは異質な主要部であるから、相対的最小性はRizzi (1990) の原案よりもさらに相対化される。主要部が同種の主要部移動のみを妨げるならば、NegはV移動を妨げないであろう」(筆者訳) という概念が浸透し、notは主要部として定着した観がある。

さらにnotを主要部とする根拠としては、VP省略現象が大きな役割を果たして

いる。Lobeck (1995)によれば、VP省略を認可する条件として、**省略 (ellipsis)**されるVPは形態的に具現した主要部の補部でなければならない。(4a)のように指定部の位置にある主語の後ではVP省略できず、(4b)のように助動詞の補部ならばVP省略できる。

- (4) a. *John didn't leave but Mary ϕ .
 b. John didn't leave but Mary did/should ϕ .

次の(5a)ではnotも直後のVPを省略できるという点で、neverとは違って主要部として機能しているように見える。

- (5) a. Some of the guests tried the hakis but most did not/*never ϕ .
 b. Some of the guests tried the hakis but most never did ϕ .

しかし(5a)では助動詞も必ず存在しなければならない。そこで念のため、I位置が空である**仮定法現在 (present subjunctive)**の構文を用いてVP省略現象を検証したのはPotsdam (1997)である。仮定法では助動詞が用いられず、notがVPを補部に取りように見える。

- (6) Charles demanded that his wife not go out with some other guy.

この構文にVP省略を施してみると、認可するのはnotのみである(not以外の副詞を付加したのはMurakami 1998)。

- (7) a. *Ted didn't want to vacation in Hawaii but his agent suggested that he
 (absolutely) ϕ .
 b. Ted hoped to vacation in Liberia but his agent recommended that he
 not/*never ϕ .

VP省略認可条件が正しいならば、(7)ではnot以外の副詞は単なる修飾語であるのに対して、notは主要部として機能しているように見え、NegP仮説に強力に貢献している。

NegPを設けると、NegP内の指定部と主要部の関係によって否定素性の照合を行うことができる(Haegeman and Zanuttini 1991)。また英語史上の否定循環もNegP内で説明が付けられる(van Kemenade 1998)。しかしNegPは決して異口同音に支持されている説ではない。文否定辞notについては未だに諸説があり、例えば長谷川(2003: 59)はAux[+Fin]を左側に引き付ける特殊な副詞とし、西岡(2006, 2007)はVPの指定部としている。しかしながらnotは機能範疇とはいえ意味的にも統語的にも存在感が大きく、その存在感がNegP分析に投影されていると言うことはできるであろう。

(村上 まどか)